

互いに認め合う温かな人間関係の構築を目指して

～自分の考えを積極的に発信し、互いに高め合う活動を創るなかで～

福井県福井市美山中学校
校長 竹野 亨

1 はじめに

本校は福井市東部に位置し、山々に囲まれ、近くに足羽川が流れる自然豊かな学校である。校舎は平成7年に改築され、床や壁には木材が多用され、木のぬくもりを感じながら毎日の学校生活を送っている。全校生徒72名（令和4年度）の小規模の学校であり、約半数の生徒がバスで通学している。

生徒たちは、登校時の校門での一礼や、立ち止まり相手を見ての挨拶、学年を解いた縦割りの活動（以下「美山の部屋」）など、これまでの伝統を守りつつ、生徒会を中心にして新たな取り組みを行っている。真面目な気質の生徒が多い反面、周りと歩調を合わせるため、主体的に行動しようとする生徒が少ない。授業中においても、生徒の積極的な発言は一部の生徒に限られ、授業中の思考が深まっていけないという課題がある。また、行事等の活動においても、積極的な生徒が中心となって進め、その他の生徒は中心となる生徒に協力しながら行っている。

2 主題設定の理由

本校の生徒アンケート（令和4年7月実施）で、「授業のめあてを理解し、わかるようになる」という気持ちをもって授業に臨んでいる」で、「よくあてはまる」と答えた生徒が67.6%、「ややあてはまる」と答えた生徒も合わせると95.8%と授業に対して積極的に取り組もうとする生徒が多いことがわかる。しかし、「授業では、自分の思いや考えを仲間や先生に伝えている」では、「よくあてはまる」と答えた生徒が45.1%、「ややあてはまる」とあわせると87.4%であり、ぐんと数値が低くなる。また、「授業では、仲間の思いや考えをしっかりと聞いて良いところを取り入れている」では「よくあてはまる」が67.6%、「ややあてはまる」をあわせると97.2%と数値が良くなる。このことから、授業では一部の生徒の発言や教員の説明をよく聞く態度が育っている反面、自らの考えを積極的に発言したり、自分の考えと比べ、その変容を他者と共有することが

行われていない。これは授業でのアンケートであるが、学校でのその他の活動においても同様であると考えられる。しかし、同じアンケートの「みんなで何かをするのは楽しい」で、「よくあてはまる」と答えた生徒が63.4%、「ややあてはまる」と答えた生徒も合わせると95.8%と、生徒同士協働し合うことに楽しさを感じている生徒が多いことがわかった。

そこで、本校生徒の真面目で黙々と行動できるよさを継続しながら、さらに、他者とのかかわりの中で、自分の考えを発信したり、いろいろな考えを交流したりすることで、互いに高め合っていってほしい。さらに、その活動により、互いに認め合う温かな人間関係が構築できないかと考えた。

3 研究仮説と研究方法

(1) 研究仮説

本研究では、生徒、教職員、保護者がそれぞれにおいてアプローチを進めるが、同じベクトルで進んでいけるよう次の研究仮説を立てる。

自分の考えの発信や思考の交流の活動を授業や生徒会での活動において幅広く多く取り入れることで、協働が生まれ、温かな人間関係が高まる。

(2) 研究の方法

① 研究のスタートにあたって

「授業で思いや考えを仲間や先生に伝える」「生徒会が主体となった取組により、多くの生徒が自ら意見を発信し合える」ことを、まず意識してほしいと考えた。

そこで、これまでの真面目な生徒の態度を認めながら、「さらに発展させてやってみよう」という気持ちを生徒に持たせたい。また、教職員の授業や行事に対しての意識改革も進める。保護者の協力も欠かせない。

日頃の授業の取組の再構築や生徒会活動を活発に行いながら、生徒、教職員、保護者が一体となって取り組みを進める。

②自分たちの手で

日頃からの生徒自らが自分たちの取組を振り返り、よりよい学校生活になるよう自治的な活動を行う。生徒会がその中心となり、話し合いと実践を行うとともに、すぐに実践の評価と改善というPDCAサイクルを確立させる。

③生き生き活動する姿を求めて

令和4年度研究テーマ「自ら学び、互いに磨き合う心豊かで創造力のある生徒の育成～行動力につながる『美山しぐさ』※をめざして」を教職員一丸となって強化重点的に取り組む。

※「美山しぐさ」とは平成29年度に「みんながすごしやすい学校になるためにもっているといい心構え」として、生徒会が作成したもの。全29項目になる。

4 実践内容

(1) 理想をきずく土台として

①学校祭の成功から次のステップへ

9月に行われた学校祭は、縦割りの活動を多く取り入れた。各分野において3年生がリーダーとして、メンバーの意見を引き出し、まとめながら創りあげる活動を行い、生徒自身が達成感を味わった行事となった。その成功をもとに、後日行われた全校集会にて、

校長から生徒たちに「次のステップを

授業をみんなで創る
自分の考え持っていますか？
自分の考え広めていますか？

考えてほしい」と提案した。その一つとして「授業をみんなで創りあげてほしい」。そのためには「自分の考えを持ち、周りに広げてほしい」と話し、授業への取組の変革を求めた。学校祭での成功体験をもとに、授業においても「自分の考えを伝え合い、自分たちの手で創りあげる」という意識を持ってほしいと校長の願いを伝えた。

②新たな教師像に迫る

2学期最初の職員会議にて、「授業を創るために、教員は生徒の学びをつなぐ役割を」の共通理解をはかった。「一方的に伝達するのではなく、…ことばを繋ぎ、問いかけを戻す…。これまでの教師が伝達者であったとすれば、新たな教師は媒介者として特徴

づけることができる…：金子奨『学びをつむぐ（協働）が育む教室の絆(大月書店、2008年)』の一節を読み合い、新たな教師像について考え、話し合いを持った。話し合いでも、教員の意見をつなぎファシリテートを大切にしながら行った。

③保護者と方向性をともにする

年度初めの4月のPTA総会で、「生徒たちが主体的に学ぶ授業を創ります」と宣言し、これまでと授業が変わってきていることを伝えた。その後も、保護者の集まる会の挨拶ではその都度、「主体的な生徒を育てるために」を話題に出し、保護者も同じ方向を向いて進んでもらう理解を促した。さらに新しく入学する6年生の児童やその保護者にも新入生説明会で「授業では積極的に自らの意見を発し、意見の交換を通して、自分の考えを深めてほしい」と「入学後にはこのメンバー全員で授業を創りあげてほしい」と入学後の取組の道筋を示した。

(2) 浮かぶアイデアと改革へ（自分たちの手で）

①2学期生徒会テーマ作成

2学期のスタートにあたり、秋季休業の期間を利用して生徒会役員と各委員会委員長で組織する中央委員会を開催した。自分たちの学校生活を振り返り、よさや課題を洗い出した。そこで課題として、「授業中に発表する人が一部である」があたり、願いとして「積極的に意見を出せる学校」や「大勢の人の前でも発言できる学校」にしていきたいと考えた。さらに、「自分の考えを発信すること」や、「聴き合うことで人の交流を図りたい」、「人との関係をよくすることで、生徒みんなが笑顔になってほしい」と考えた。そこで、全生徒が2学期間意識しやすいように「ことば～心からの笑顔を創るために～」を生徒会テーマとして掲げた。



②2学期生徒会テーマの意識付け

テーマを発表した当日にGoogleFormsで全生徒

に対して生徒会から「テーマについての感想を聞かせてください」とアンケートを行った。感想では、「このテーマのように相手に自分の思いを伝えることが大切だと思った。」や「話すことだけが意見を言うということではなく、書くという方法でも思いを伝えられるということが伝わっていいと思います。」「美山中の課題となる発信について考えるために、何においてもことばが大事なんだなと感じました。」など、生徒自身が考え取り組んでいく第一歩を踏み出した。

③生徒会の発信

「朝のあいさつ運動」では、生徒会役員が玄関に立ち、登校する生徒たちにあいさつをする。2学期生徒会役員は「おはようございます」とさらに「ひとこと」声をかけるようにしていた。「今日は寒いですね」や「今日の朝ご飯は何を食べましたか」、そして前日欠席した生徒には「大丈夫?」などである。声をかけられた生徒は、立ち止まり笑顔で答えている。1日のはじまりをにこにことした笑顔でスタートさせている。

④学級委員会授業評価の取組

2学期はじめの生徒総会で、生徒会長より、授業評価を行っていくことの確認と「自分の意見を

| 授業評価 | | /年 | |
|------|------|------|------|
| 科目 | 授業内容 | 発問の質 | 発問の量 |
| 国語 | 4 | 3 | 3 |
| 社会 | 4 | 4 | 3 |
| 数学 | 4 | 4 | 3 |
| 理科 | 4 | 3 | 4 |
| 英語 | 4 | 2 | 3 |

積極的に発信してほしい」と呼びかけた。12月に授業

の評価を行った。4点満点で自己評価を行うが、その評価項目の一つを「発表、積極的な意見の発信」とした。その評価の結果を模造紙に書き、全校生徒へ知らせた。結果は3.3点と目立った改善は見られなかった。そこで、模造紙に「みんながいろいろつぶやいていてとてもよかった」、「反応がよかったよ」、「質問するとすぐわかるね」「質問にもっと反応しよう」などコメントを追加し、よかった点と課題を見える化した。

⑤カルタ大会（美山の部屋）

12の縦割りの美山の部屋の活動を行った。それ

ぞれの学年2～3名で1グループは6～7名になる。この縦割りのグループで、生徒会が企画したゲームを行ったり、ウォークラリーを行ったりという活動を行ってきたが、令和5年1月にはカルタ大会を行った。カルタ大会当日までに、各グループで、読み札と取り



札を自分たちで作成した。カルタ大会当日は、各グループで、会

話をしながら、楽しく取り組む姿が見られた。読み札の言葉が大変優しい言葉が多く、メッセージ性も高かった。次はその一部である。「おやまのきれいなみやまちく」「いつまでも美山の自然を守りぬこう」「せいとかいメンバーの優しい笑顔マジ天使」「輪をつなぐ心の手を取りみな仲間」「ここにことみんなの笑顔はすてきだね」

(3) 専門性を磨き研究を深める

①授業をみとる

令和4年12月に2年生の理科で「天気図との資料をもとに、明日の天気を予想する」という授業が行われ、全教員が参観した。具体的な3時間ごとの前日の天気図等をもとに、グループで天気の変化を共有しながら、明日の天気の予測をしていく。教員は、6つあるグループのそれぞれのグループでの活動を見とるようにする。最初は天気図が読み取れなかった生徒も、グループでの話し合いを続けることで天気図が読み取れるようになっていく。さらに「この前線がこれからどうなっていく?」など、話し合いが深まっていく。グループのメンバーがぐっと身を乗り出し、天気図を見る。ぐっと集中力が高まる。グループ



活動で、生徒の変容をじっくりとみとる教師の経験ができた。

②ことばをつなぐ教師

生徒の思考と発言を大事にしながら、ことばをつなぐ授業展開が増えてきている。校長通信（不定期に教職員に発行する校長の雑感を記したもの）にも、その授業展開での、生徒の発言や発言のつながり、教師のつなぎなどを記し、他の教員にも広めた。生徒の発言をつなぎ、コーディネートする新たな教師像を追究しはじめた。

③授業の様子を保護者、地域へ伝える

毎月発行している学校便りに、授業での取組を掲載している。特に、令和4年12月号では、全校道徳で「人権」について考えるためのグループでの対話を重視した授業の様子を掲載した。また、バランスのとれた生活を！というテーマで、養護教諭とスクールカウンセラーの二人による授業の様子を、家庭科の「献立づくり 家庭で調理してみよう」の栄養教諭の授業の様子を特集した。授業で、生徒たちが主体となる実践を行っていることを、保護者や地域の方に知ってもらうようにした。

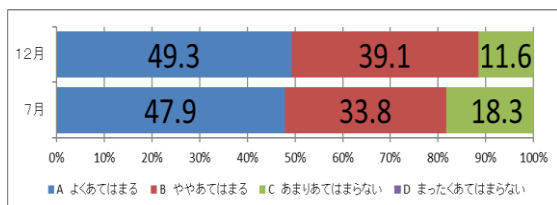
5 成果と課題

(1) アンケート結果より

生徒アンケート(令和4年12月実施)で、「授業では、自分の思いや考えを仲間や先生に伝えている」では、「よくあてはまる」と答えた生徒が36.2%、「ややあてはまる」とあわせると86.9%であり、授業の中で、自分の思いや考えを仲間や生徒に伝える生徒の割合は、7月のアンケートと大きな変容は見られなかった。

しかし、「仲間の意見でわからないときは、積極的に質問し、理解しようとしている。」というアンケートでは、12月では肯定的に答えている生徒の割合が増えた。

仲間の意見でわからないときは、積極的に質問し、理解しようとしている。

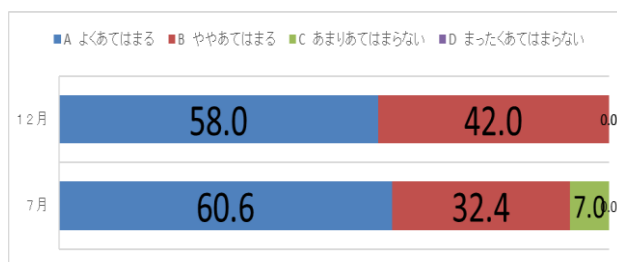


質問しあえる安心感のある雰囲気があった。これは、生徒会の取り組みにより、生徒同士の人間関係が深まり、互いに信頼し合える関係になっていることが大きな要因である。また、授業者が、生徒の言葉をつなぐ授業展開を行ったことも要因にあげられる。一人一人

の生徒の発言を大切にし、その発言を生徒たちに返す。生徒たちの聴く態度が育ってきているのも授業者の生徒の言葉をつなぐことと大きく関わってくる。

また、「ペアやグループで考えるとき、人任せにせず、一生懸命考え活動しようとしている。」では、7月に「あまりあてはまらない」と答えた生徒が7%であったが、12月には「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と答えた生徒が0人となり、すべての生徒が肯定的に答えた。これまでのペアやグループでの話し合い活動では、消極的で受け身の生徒もいたが、12月には、すべての生徒が、主体的に行動するようになっている。

ペアやグループで考えるとき、人任せにせず、一生懸命考え活動しようとしている。



ペアやグループ活動での関わり方に変化があらわれたのは、日頃の授業の中でペアやグループでの取組や美山の部屋での縦割りでの役割を意識しながら活動ができた成果である。また、教師が授業で生徒の活動をみとる視点を持っていることも要因として挙げられる。

(2) 取組の考察

生徒、教職員が一丸となって、発信に取り組んだことで、生徒たちの姿の変容が見られた。特に、生徒自身の「他者への質問や理解」について、大きな変容を見ることができた。また、様々な活動での発信により、思考の交流が行われ、ペアやグループでは、すべての生徒が主体的に活動を行った。それは、生徒同士での人間関係における信頼感のもとでの活動で安心感を生み、互いに認め合う関係性が育ったからだろう。

取組を行っていく先で、生徒同士で、「主体的に行動するとは」という新たな課題を見つけ、その課題の解決のために、生徒会が仕組んだ「スタディウイーク」という授業開始前の取組を行う場面も見られた。

授業は、生徒同士、教師のやりとりで、毎日違った関係性を生む。生徒が主体となった生徒会活動は、可能性が無限に広がる。この活動を今後も大切にしたい。